

- ACSと私P1
- 知彼知己者、百戦不殆P2
- ACSの思い出P3
- 秋山洋先生とACSP4
- ACSとWindy Cityの思い出P5
- New FellowとしてP6
- Alumni PartyとJapan Chapter Cocktail Reception.....P7



ACS日本支部ニュース

NEWSLETTER FROM THE JAPAN CHAPTER
OF AMERICAN COLLEGE OF SURGEONS



千葉徳洲会病院院長

加納 宣康

Nobuyasu Kano, MD, FACS, Director, Chiba Tokushukai Hospital

ACSと私

私とACSとの関係、思い出について記載させていただく。

私は卒後8年目くらいから、「手術にはかなり自信を持てるようになったので、これからは学会発表と論文発表も積極的にしよう」と思うようになり、日本語中心だが、論文数も伸ばしていった。

卒後12年が経過したころ、日本外科学会雑誌のアナウンスメントの中に、「International Guest Scholar of American College of Surgeons (以下IGS of ACS)」に関する記事を見つけた。

私は沢山の手術をしながら、急速に論文数も積み上げて来ていた時期だったので、「これに応募したら自分は選出されるのではないか」と思った。しかし、よく読むと、応募資格が「研究機関に所属している者」となっていた。当時、私は松波総合病院に勤務していたため、同院はどうみても研究機関とは言えないので、「応募する資格がないということか」と悔しい思いをしていた。

そんなことを考えている中、縁あって、帝京大学医学部附属溝口病院外科へ移動する話が出てきて、私は新しいもの見たさに、移動する決心をした。

1991年に岐阜大学医学部第一外科の関連病院から転職したのであったが、帝京へ移ってふと思いついたのが、「米国外科学会IGS」への応募のことであった。「今、自分は帝京にいる。ここなら十分りっぱな研究機関だ」と考え、1992年に応募することにした。

推薦者が2名、必要であったので、一名は当時の上司である山川達郎先生にお願いし、もう一名は当時、聖路加国際病院院長であられた櫻井健司先生にお願いした。

業績には自信があったので、おそらく選出されるのではないかと期待しながら応募した。

応募締め切りが7月末で、発表が翌年1993年の2月であった。1992年当時はまだ電子メールが一般化していなかったので、結果の連絡は郵便によるものであった。

私はACSからの郵便物を手に取ったとき

に、合格通知に違いない、と思って、興奮で震える手で封書を開けた。予想通り合格通知であった。後に櫻井健司先生から、「加納君、おめでとう。これは日本人では初めての快挙だよ」と知らされ、びっくりした。私は日本人も数年に一人くらいは選出されているものと思って応募したからだ。

私は医学部卒業後2年くらいで、外科のレジデントとして米国への留学を予定していたのであったが、ベトナム戦争の終了により、大勢の米国人医師が帰国したため、米国としては外国人医師を採用する必要がなくなり、私の外科のレジデントとしての米国入国は不可能となり、日本で外科修業をせざるをえなくなったほろ苦い思い出があったので、米国外科学会IGSになれた時には、若き日の無念を晴らせたと思った。これで「米国での外科修業はしなかったが、十分に力を示すことができた」と考えたのだ。

IGSに選ばれると、十分な渡航費と滞在費が与えられ、1993年秋のclinical congressにも招待されるという歓待ぶりであった。またpost-congress tourがあり、自分がこういう施設を訪問したいと連絡しておく、ACSの方で、その希望に相応しい医師を紹介し、交渉もしてくれるシステムであった。

私は、腹腔鏡下手術と肝胆膵外科に強い興味があったので、その旨を伝えておくと、clinical congressの後、アトランタのJohn Hunter先生のもとで1週間、ヒューストンのMacFadyen先生のもとで1週間、そしてロサンゼルスでTompkins先生のもとで1週間の滞在が組まれた。それぞれのところで充実した1週間を過ごさせていただいた。現在も、Hunter先生とMacFadyen先生とはいろいろなお会いし、ご指導をいただいている。両先生は後に鴨川までおいでになり、亀田総合病院を見学していただいたこともあった。Tompkins先生にも学会で何度もお会いした。

IGSになると、ACS本部からfellowにもなる手続きをするようにと指示がきた。1995年に、現在大阪大学教授の森 正樹

先生といっしょにfellowになった。当時はfellowになれる数が限定されていたこともあって、同年では日本人は二人のみであった。

代々のIGSは、毎年clinical congressの際に、IGSのLuncheon Meetingがあり、それには毎年招待され、代々のIGS達に会って交流を深めている。

このIGS達の面倒を長年に渡ってみてくださったのがACS本部のMarion E Rappさんであったが、数年前にお亡くなりになった。ACSの功労者であったので、Bulletinではそれを悼む特集が組まれた。生前、Rappさんから、そのような際にはDr. Kanoとの写真を載せるように指示がでていたようで、その号には、私とRappさんのツーショットの写真が掲載されていた(写真)。私は迂闊にもしばらく気づかずにいたのだが、尾形佳郎先生からご連絡をいただいて知ったしだいであった。とにかく私にとっては、日本人

第一号のIGS of ACSになれたのは、40歳代前半の一代イベントであった。

いろいろなことが想起され、紙面の都合で書ききれないが、ACSにはこのように大きな恩があるため、現在もできるだけ協力するようにしている。



published February 1, 2012

略歴

- 1949年8月4日、岐阜県土岐郡(現在、多治見市)生まれ。
- 1976年、岐阜大学医学部卒
- その後、岐阜大学病院医員(研修医)、郡上中央病院外科医員、岐阜大学病院医員、国立東静病院麻酔科および外科医師、1985年、岐阜大学医学部文部教官(助手)、1986年4月、羽島市民病院外科部長、1987年10月、松波総合病院統括外科部長、1991年5月、帝京大学医学部講師(溝口病院)、1992年11月、インド国インドールIndore市、M.G.M.医科大学(マハトマ・ガンジー・メモリアル医科大学) 常任客員教授 Permanent Visiting Professor
- 1993年2月、インド国インドールIndore市、M.G.M.医科大学(マハトマ・ガンジー・メモリアル医科大学) 名誉客員教授 Honorary Visiting Professor
- 1993年7月、帝京大学医学部外科学講座助教授
- 1993年、米国外科学会(American College of Surgeons)のInternational Guest Scholar
- 1995年、米国外科学会(American College of Surgeons)のfellow (F.A.C.S.)
- 1996年5月、亀田総合病院外科部長兼内視鏡下手術センター長
- 1997年2月、亀田総合病院主任外科部長、兼内視鏡下手術センター長
- 2003年4月、亀田総合病院 特命院長補佐、主任外科部長、内視鏡下手術センター長
- 2006年4月、帝京大学医学部外科学客員教授
- 2009年4月、亀田総合病院 特命副院長、主任外科部長、内視鏡下手術センター長、安房地域医療センター 顧問
- 2014年4月、亀田総合病院 副院長、(外科顧問、内視鏡下手術センター長併任)
- 2014年11月、日本臨床外科学会賞受賞
- 2016年4月1日、千葉徳洲会病院院長



アイオワ大学、外科、腫瘍外科学部門、准教授
ACS アイオワチャプター、ガバナー

星 寿和

Hisakazu Hoshi, MD, FACS, Governor, Iowa Chapter, Associate Professor, Division of Endocrine and Surgical Oncology, Department of Surgery, University of Iowa Hospitals and Clinics, Associate Deputy Director, Holden Comprehensive Cancer Center

私が日本の医学部（滋賀医科大学）を卒業したのが1991年であるから、外科医になりかれこれ25年になる。その内、日本での外科医としての研修が4年、指導医としての実診療が4年（滋賀医大2年、亀田総合病院にて加納宣康先生の下で2年）、米国での一般外科の研修が5年、腫瘍外科のフェローシップが2年、研究が1年、アテンディングとして実診療に関わってきたのが8年となる。ずいぶんと遠回りをした様にも思えるが、2つの全く異なった教育システム、医療文化の中で教育を受け、実診療に携わってきたことより見える様になったことも多々ある。ではいったい、日本とアメリカの医療の違いはどこにあるのだろうか？違いを知った上で、グローバルな視点に立ち、何が出来るのであろうか？

アメリカの医学教育は日本に比べて進んでいると一般的に考えられている。アメリカは日本に比べて研修構造が整っており5年という比較的短い期間にて、独り立ちして安全に診療を行える外科医になる事が出来る。特に系統的に知識を伝授するには、広い分野に渡る外科学を責任を移行しながら、非常に多くの多種多様な症例を基に行うアメリカの教育方法は効果的である。しかしながら、80時間の労働規制以降、経験する症例数の減少や患者のハンドオフの増加に伴い、外科のトレーニングを終えた外科医の質の低下が認められているのも事実である。アメリカではあまりにも早くより中級以降の手術をさせるので（させなければならないので）手術の基本操作の習得がおろそかになりがちであり、手術の難易度が上がるにつれ基礎力のなさが露呈してくる事も多々見受けられる。

一方、日本は80時間の規制はなく、長時

間の労働による疲弊と非効率な研修となる恐れがある一方、患者さんと向き合い基本的な診療能力を身につける時間が十分に取れる。また日本の外科の研修は基本的な手術操作からしっかりと教育されるので、高難度の手術を高い質を保って行う外科医を育てる事が出来る。ただ、後期研修は基本的には高度に専門化された外科の領域を研修するように構築されているため、広い意味での一般外科を実践できるレベルまで研修する事は非常に難しいと思われる。日本の専門化された外科医のレベル、特にその領域における技術のレベルは世界的に見ても非常に高いものがある。それに対してアメリカの外科医は専門家であっても比較的広い領域の知識と技術を持つのが一般的である。

では実診療はどう異なっているのだろうか？アメリカの医療、特にがんの治療はチーム医療であり、専門家のチームが一人の患者を診るのが一般的な形態である。チーム医療の良さは一人の知識や技量に制限される事なく、最新の技術や知識に基づいた治療を徹底した議論の後、選択してゆけるところにある。ただし、コストの面で非常に効率の悪い医療であり、コスト削減のために治療のパスウェイ化やpopulation based medicine（医療を個人の利益よりも、社会の利益の観点より行う医療）が行われ、患者さん個人には不利益をもたらすケースも多々見られる。日本では主治医（または科長）個人の知識、技術により提供される医療のレベルに格差が生まれる可能性があり、同僚や他科の医師によるサポート、クオリティーチェックが掛かりにくい場合がある。ただし、患者さんにとってはアメリカに比べ至れり尽くせりの医療である事は、間違いのない事実である。

知彼知己者、百戦不殆

「知彼知己者、百戦不殆」（彼を知り己を知れば百戦殆からず）という故事がある。孫子の兵法であるが、異国にて学び、国際社会にて活躍する事にある意味通じるものがある。異なった文化を持つ異国にて、研修を行い、学ぶと言う事は、自分自身の欠点を見つめ克服すると共に、自分の今まで気づかなかった良さを再認識する効果がある。その結果得られるの

は、何が国際的に求められている事を知り、自分の国際社会での役割を明瞭に自覚することである。

これから日本の医療を背負って立つ世代の日本の外科医が、若い頃より世界で学び、将来日本の外科の良い部分を世界に広め、日本においても外国の良い部分を積極的に取り入れるように活躍される事を、願って止まない。

略 歴

1991年4月	滋賀医科大学、第一外科、医員（研修医）
1992年4月	大津市民病院、麻酔科、医員（非常勤）
1992年7月	University of Michigan, MI USA, Department of Surgery, Research Fellow
1993年7月	滋賀医科大学、第一外科、医員
1993年12月	弘英会琵琶湖大橋病院外科、医員
1996年7月	Thomas Jefferson University Hospital, PA, USA, Department of Surgery, Resident
1998年7月	Mercy Catholic Medical Center, PA USA, Department of Surgery, Resident
2001年7月	Roswell Park Cancer Institute, NY USA, Department of Surgical Oncology, Clinical Fellow
2001年7月	State University of New York at Buffalo, NY USA, Department of Surgery, Clinical Instructor
2003年7月	滋賀医科大学、医学部、附属病院、救急部、助手
2003年10月	滋賀医科大学、医学部、附属病院、安全管理部（兼務）
2004年3月	滋賀医科大学、医学部、附属病院、感染対策委員会委員
2004年8月	滋賀医科大学、医学部、附属病院、乳腺一般外科、助手
2005年4月	鉄蕉会亀田総合病院、外科、医長
2006年4月	鉄蕉会亀田総合病院、卒後教育委員会、委員（兼務）
2007年3月	University of Iowa Hospitals and Clinics, IA USA, Department of Surgery, Division of Surgical Oncology, Assistant Professor
2008年1月～2012年6月	University of Iowa Carver College of Medicine, Department of Surgery, Student Clerkship Director
2011年7月	University of Iowa Hospitals and Clinics, IA USA, Department of Surgery, Division of Surgical Oncology, Associate Professor
2011年7月	Holden Comprehensive Cancer Center, University of Iowa Hospitals and Clinics, Cancer Committee, Chair
2012年7月	University of Iowa Hospitals and Clinics, Department of Surgery, Faculty Development Program, Associate Director
2012年10月	Holden Comprehensive Cancer Center, University of Iowa Hospitals and Clinics, Associate Deputy Director

ETHICON
PART OF THE *Johnson & Johnson* FAMILY OF COMPANIES

より綺麗なステイプル形成を目指して

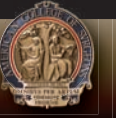
GST SYSTEM

Powered
ECHELON FLEX® GST® System

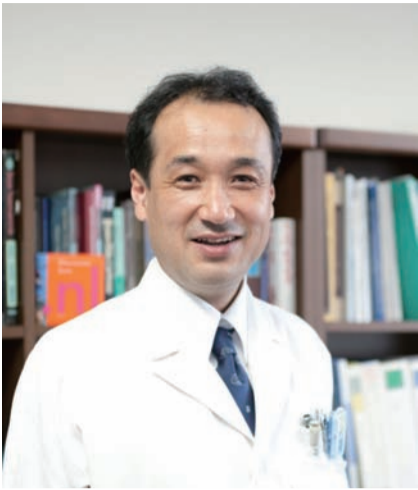


製造販売元: ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社 メディカル カンパニー 〒101-0065 東京都千代田区西神田3丁目5番2号 TEL (03) 4411-7905
管理医療機器 販売名: エンドスコピック パワード リニヤー カッター 認証番号: 22500BZX00396000
高度管理医療機器 販売名: GSTカートリッジ 承認番号: 22700BZX00155000

ETHD0470-01-201602 ©J&JKK 2016



ACSの思い出



■ 長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科 移植・消化器外科 教授

江口 晋

Susumu Eguchi, MD, FACS, Nagasaki University

私とACSとの関係は比較的長い。あれは1995年の秋、最初の留学をLAにしていた頃、当時の兼松教授、古井助教授、関連病院の千葉院長がニューオーリンズでのACSに来られるので、私もLAから同行しないと誘われた。ボスの故Dr. Demetriou (以下 Dr. D) に尋ねたところ、自分も参加するので行きましょう! と言われ、何の学会かも良くわからずに参加することとなった。現地では Bourbon street のレストランに Dr. D に招待され、初めて高級フレンチを食したのを覚えている。その際にACSがアメリカの全外科医が目標とする巨大な学会であることを初めて身を染みて覚えた。また展示会場の広さ、また新しい器械の斬新さに心奪われた。

翌年はラボの若手皆で目標としていたACSに抄録を提出したところ、Surgical Forum に採択され、サンファンシスコに堂々と出向き、Oral presentation を行った。事前にラボで予行を行ったが、その際に Dr. D に「十分に予習して、自分が発表する内容は世界で自分が一番詳しいと自信を持って発表すること」と薫陶を受けたのを思い出す。Dr. D はとてもスマートな academic surgeon であった。こ



初めてのACSで兼松教授、古井助教授、千葉院長と

の時もSFの高級レストランに連れて行って頂いた。デザートには「ミルファーが美味しいよ」といわれ注文しが、それが「ミルフィーユ」であることは現物が来るまでわからなかったのは言うまでもない。

帰国してからは関連病院勤務などでACSから遠ざかっていたが、確か2006年のことであろうか。兼松教授より「日本外科学会のACS exchange fellow に応募してみたら?」と声をかけて頂き、早速書類をまとめてみた。恐らく兼松先生自体が理事だったこともあり、幸い採択の荣誉を授かり、この時はACS参加のみならず、世界各国の若手フェローとの昼食会、発表会、学会後のクリーブランドクリニックとマイアミ大学の肝移植外科の見学も叶い、とても充実した経験をさせて頂いた。その際に知り合いになった、橋元宏治先生、西田正剛先生、加藤友朗先生とは今でも交友を続けている。翌年FACSに申請し、convocation でガウンセレモニーも経験し、現在は後輩の指導を行っている。近年は毎年教室に入ってくれた3年目の外科医を伴ってACSに参加し、世界の外科の標準レベルを体感してもらうようにしている。Convocation はアメリカの外科医が家族を

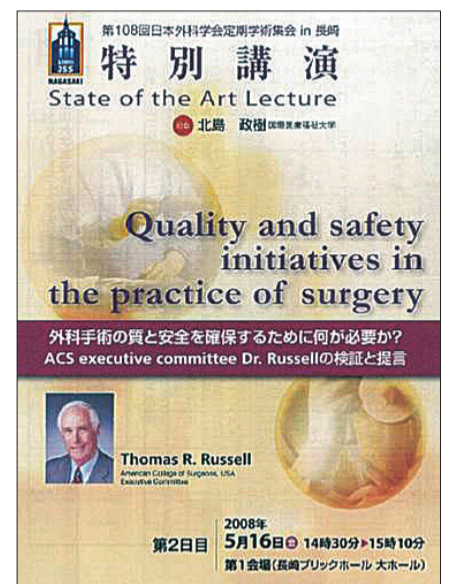


2006 ACS exchange fellow の面々、Ms. Kate Early と。

伴い参加するが、「これでやっと一人前の外科医。これからは稼いでもらいまっせ!」といったニュアンスも感じられ、楽しい。

さらに良く思い出すとACS日本支部会の president を兼松先生が務められていた際に、日本支部会の Secretary general を拝命し、年会費の収集、日本外科学会の際の日本支部会の開催、その際の演者との交渉、会計報告を行っていた。会の運営を初めて任された仕事であった。前職の横浜医大の渡會伸治先生、次の京大の高折恭一先生への引継ぎなど、今でもよく覚えている。最後に、2008年の長崎での外科学会の際に故 Thomas Russell 会長に来て頂き、長崎をご案内できたことは私にとっての大

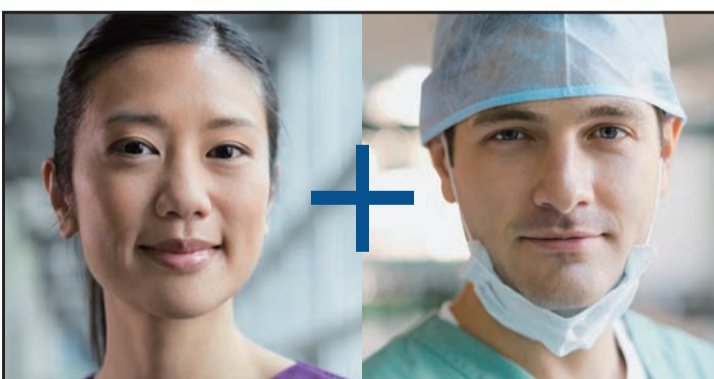
きな喜びであった。



2008 故 Thomas Russell 先生を長崎へご案内。

略歴

1992年3月	長崎大学医学部卒
1992年5月	長崎大学第二外科(現 移植・消化器外科)入局
1993年9月	長崎市民病院外科
1994年4月	長崎大学大学院医学研究科 第二外科(現 移植・消化器外科)
1994年7月 ～1997年3月	米国 Cedars Sinai 医療センター外科 リサーチフェロー
1998年3月	長崎大学大学院博士課程修了
1999年1月	長崎記念病院 外科
1999年4月	国立対馬病院(現 中対馬病院) 外科医長
2000年4月	長崎県立島原温泉病院 外科
2003年4月 ～2005年3月	オランダ Groningen 大学病院 肝移植・ 肝胆膵外科臨床フェロー
2005年4月	長崎大学移植・消化器外科 助教、 講師(2009年4月)、准教授(2009年10月)
2012年1月	長崎大学移植・消化器外科 教授



INNOVATING WITH
PATIENTS AND
PROVIDERS
IN MIND

より良い医療の実現を目指して

Further, Together
共に医療を次のレベルへ

©2016 Medtronic Japan Co., Ltd. All Rights Reserved.

medtronic.co.jp

コヴィディエン ジャパン株式会社

Medtronic



杏林大学外科（消化器一般） 教授

森 俊幸

Toshiyuki Mori, MD, FACS, Department of Surgery, Kyorin University

大学卒業時、外科医をめざすことを決め虎ノ門病院レジデントとなりました。当時の指導医は手術の名手として名高い秋山洋先生であり、私が知る手術技法の殆どは当時学んだことです。秋山先生がお書きになった「手術基本手技」が当時の手術手技書のバイブルであり、臓器の3次元的な展開や組織のテンションやカウンターアクションなどが身についたのも虎ノ門病院での研修の賜とっております。「手術基本手技」すでに絶版となっていますが、先日アマゾンで検索したら、中古品はまだ市場に出回っており入手可能なようです。見たことのない方は一読を勧めます。

秋山先生は当時（1980年頃）には珍しく、自分の手術成績をまとめ、ACSやSSATで発表されていました。また精力的に論文発表もされAnn SurやBJSにも論文が掲載されており、日本を代表する食道外科医として海外に名をはせておりました。一方研修医の私にとっては、海外での学会活動などとうてい想像力の及ぶ範囲ではなく、とにかく凄い先生というのが率直なところでした。また秋山先生をロールモデルにしても、あまりに彼我のギャップが大きく、実際どこからはじめて何を努力すれば、秋山先生のようなになれるのかは全くわからない状況でした。

虎ノ門病院での研修が終わり、東大の研究室に出入りするようになると、自分の

研究成果を海外学会で発表するようになりました。このときに、自分のデーターを発表し聴衆と討論するばかりでなく、他の研究者の発表にたいする討論にも積極的に参加しコミュニケーションをとっていくことが国際的リエゾンの原点なのだと知りました。米国医師と話すときに、研修は何処だったのかと良く聞かれましたが、殆どの方がEsophageal Surgeon Hiroshi Akiyamaを知っているのも驚きでした。さらに特に米国では、大小の外科医のコミュニティーが形成されておりフリーメイソンの性格をおびている事も感じ取りました。

UCSFに留学したのは1991年でした。森岡恭彦先生が主催された消化器外科学会のゲストスピーカのLawrence Way先生を頼り何とか職を得ました。渡米時にUCSFにはCarlos Pellegrini先生（前ACS President, Washinton Univ.）が在籍しておりました。ご存じのようにPellegrini先生は食道疾患で有名な方ですが、その師匠はUSCのDeMeester先生であり更に源流はDeMeester先生の研修先のJohns Hopkins HospitalのSkinner先生にいきつきます。秋山洋先生の源流にもSkinner先生がおり、Pellegrini先生と同じ流れの下流にいるのかと互いに驚きましたが、米国ではこういった何者かがわかるというのが大切だと思います。親戚弟子だったからというわけでもない

と思いますが、以来に親交を暖めています。このような師弟関係は至るところで語られており、移動や就職のさいにも重要な意味を持っていることを知ったのも留学後のことでした。米国の学会、特にACSはこうした個々のつながり多数あつまり、さらにネットワークを形成していると思います。このつながりの中において、外科学の進歩を皮膚感覚として体感できるのがACS fellowである最大の意義であると思います。小生もフェローの一員となりました。今後もネットワークのノードとしてより積極的に外科の進歩にかかわって行きたいと思っています。

この頃、若手外科医の手術の前立ちをする機会が増えてきております。若手の手技をみていると、教わった師匠のクセを必ず引き継いでおり、ときにその源流までわかることもあります。私も秋山先生から教わったことをわかりやすく伝え、手術は森に教わったと外科医を一人でも多く養成したいと思っています。また手術手技や

考え方を伝承していくことが外科の歴史だと思っています。私の後輩達にも、君たちは歴史のなかにおり、それを引き継いでゆく責務があることを伝えたいとおもっています。また国際的な視点を持ち、日本から発信した情報で世界の外科を進歩させるという気概をもった秋山先生のような外科医にも多数活躍して欲しいと思います。

秋山先生は2012年9月19日に鬼籍に入られましたが、ACS CC時に、追悼のセレモニーを催して頂きました。秋山先生がお元気だったころACS congressのConvocationでお見かけ致しました。兄弟弟子の吉田和彦先生と3人でとった写真です。秋山先生のご冥福をお祈り致します。



略 歴

1980年
1980年～1984年1984年
1990年

1991年

1995年
2008年

東北大学医学部卒業
国家公務員共済組合連合会
虎ノ門病院 外科
東京大学外科
埼玉医科大学総合医療センター
救急救命センター
カリフォルニア大学
サンフランシスコ校外科（UCSF）
杏林大学外科
同教授

OLYMPUS

Your Vision, Our Future



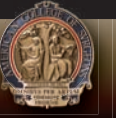
製造販売元: オリンパスメディカルシステムズ株式会社
販売名: サージカル ティシュー マネージメント システム 医療機器番号: 22500BZX00335000
販売名: 高周波焼灼電源装置 ESG-400 医療機器番号: 22500BZX00336000

世界初、1本のシザーズでバイポーラエネルギーと超音波エネルギーを同時出力。

オリンパス株式会社

THUNDERBEAT

www.olympus.co.jp



東京慈恵会医科大学外科 准教授
同附属柏病院 手術部長

三澤 健之

Takeyuki Misawa, MD, Ph.D., FACS, Department of Surgery, The Jikei University

ACS と Windy City の思い出

大学を卒業して、恩師である櫻井健司先生（慈恵医大旧第1外科主任教授、Governor, ACS Japan Chapter、当時）のお部屋に初めて伺ったのは1986年の春。額に飾られた、F.A.C.S.のcertificateの意味も分からず、我武者羅な研修生活が始まった。ACSとの出会いは、その5年後の1991年。大学院で門脈圧亢進症の研究に没頭していた時期で、それまで色々と相談に乗っていただいていた、吉田和彦先生（現 Secretary, ACS Japan Chapter）に誘われるまま、秋のChicagoに飛んだ。黄色く色付いた街路樹とミシガン湖からの冷たい風（windy cityと呼ばれる所以）が印象的な凛とした街だった。映画、逃亡者（ハリソンフォード主演）の舞台でも有名な、歴史あるChicago Hilton HotelのBallroomで執り行われたConvocation Ceremonyは只々荘厳で、オルガンの演奏に合わせて入場するFellow達のガウン姿が眩しかった。この年の会期中に訪問したシカゴのCook County Hospital Trauma Centerは日本でも好評を博したTVドラマ「ER」の舞台となるところで、部長のJohn A. Barrett先生とはその後も交流を持ち、私の

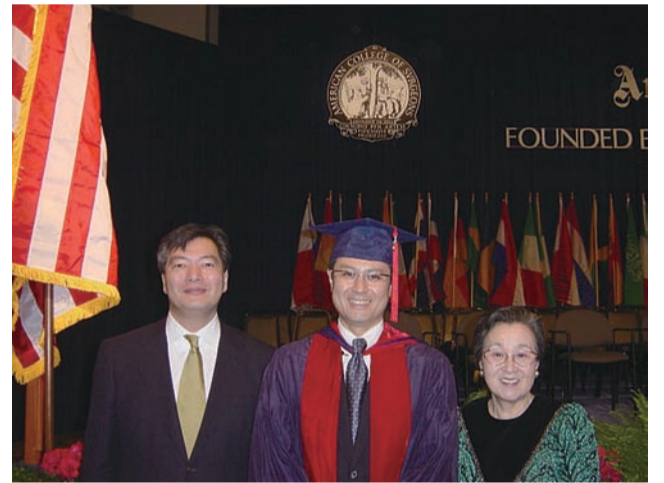
自宅にもお招きした。また、Congressの後に立ち寄ったシンシナティのジョンソン・アンド・ジョンソンのラボでは、当時日本ではまだ誰も行ったことのない、腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術のhands-on courseに参加する機会を得た。インストラクターのArnold Seid先生（St. John's Hospital, Santa Monica）はのちに私の留学を斡旋してくれることとなった。

2003年、留学先であった南カリフォルニア大学外科のTom R. DeMeester先生、櫻井健司先生、矢永勝彦先生（慈恵医大消化器外科主任教授、現 Governor, ACS Japan Chapter）を含む、日米5名の先生方のご推薦をいただいてFellowとなった。巡り合わせか、Convocation Ceremonyは思い出深いChicago Hiltonで行われた。最後の孝行と思い、当時、すでに不治の病に侵されていた母を連れて行ったが、その時一緒に撮影した写真は最後まで母の枕元に飾られていた。

アメリカの外科医にとってのFACSは、厳しいレジデント生活を終えてようやく一人前の外科医に成長したことの証であり、特別な意味

合いを持つ。Certificateとともに与えられるFellowship PledgeやWhat the Surgeon Ought to Beに目を通せば、その重さを窺い知ることができる。しかし、私たち日本人が彼らのFACSに寄せる思いのすべてを理解することは到底できない。とはいえ、ACSは昔も今も国境を越えて外科医が交流する場であり、そこには人生の針路を決定づけるような出会いがある。私自身、これまで大いにその恩

恵を受け、感謝の念に堪えない。これからもACSを通して多くの日本人若手外科医が国際交流を深め、世界で活躍するチャンスを掴んでいただけたら素晴らしいことであると思う。



吉田和彦先生、亡き母とともに
(2003年10月、Chicago)

略歴

- 1986年 帝京大学医学部卒業
東京慈恵会医科大学附属病院外科研修医
- 1992年 東京慈恵会医科大学大学院卒業、医学博士
- 1994年 米国南カリフォルニア大学医学部外科研究員
- 2000年 東京慈恵会医科大学外科講師（専任）
- 2003年 Fellow of American College of Surgeons
- 2009年 東京慈恵会医科大学外科 准教授（専任）
- 2013年 東京慈恵会医科大学附属柏病院 外科診療副部長
（一般・消化器外科責任者）
- 2013年 Visiting Professor, University of North Carolina, Carolinas Medical Center
- 2014年 東京慈恵会医科大学附属柏病院 手術部長

Septra Technology for Ventral Hernia Repair



BARD® VENTRIO® ST
バード® ベントリオ® ST
●腹壁ヘルニア修復用メッシュ
承認番号: 22700BZX00250000
クラス分類: [4] 高度管理医療機器
一般的名称: 吸収性ヘルニア・胸壁・腹壁用補綴材
償還区分: 織維布・ヘルニア・腹膜欠損



BARD® VENTRALEX® ST
バード® ベントラレックス® ST
●腹壁ヘルニア修復用メッシュ
承認番号: 22700BZX00249000
クラス分類: [4] 高度管理医療機器
一般的名称: 吸収性ヘルニア・胸壁・腹壁用補綴材
償還区分: 組織布・ヘルニア・形状付加



BARD® VENTRALIGHT® ST
バード® ベントラライト® ST
●腹壁ヘルニア修復用メッシュ
承認番号: 22500BZX00465000
クラス分類: [4] 高度管理医療機器
一般的名称: 吸収性ヘルニア・胸壁・腹壁用補綴材
償還区分: 織維布・ヘルニア・腹膜欠損

●事前に必ず添付文書を読み、本製品の使用目的、禁忌・禁止、警告、使用上の注意等を守り、使用方法に従って正しくご使用ください。
同製品の添付文書は、弊社WEBサイト及び独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)の医薬品医療機器情報提供ホームページでも閲覧できます。
Bard, BARD, VENTRIO, ベントリオ, VENTRALIGHT, ベントラライト, VENTRALEX, ベントラレックスは、C. R. Bard社の登録商標です。
Davol, デイボールは、DAVOL社の登録商標です。
製品の仕様・形状等は、改良等の理由により予告なく変更する場合がございますので、あらかじめご了承下さい。





製造販売業者
株式会社 メディコン
本社 大阪市中央区平野町2丁目5-8
06(6203)6541(代)



ヘルニアに関する情報が欲しい!...と思ったら
medisuke.jp
にご登録ください。



New Fellow として

東京慈恵会医科大学 外科学講座 乳腺内分泌分野 講師

野木 裕子

Hiroko Nogi, MD, FACS, Department of Surgery, The Jikei University

平成 27 年、ACS のフェローとな
らせていただき、大変光栄に思いま
す。このような機会を与えてくださ
いました諸先生方には感謝の念が尽
きることはありません。

私は、ブラックジャックのメスさ
ばき、外科医有森冴子の包容力にあ
こがれ、平成 3 年の春、外科の道へ
入りました。当時、女性が外科を選
択する際、“結婚しない。出産しな
い。”という宣誓が必要な時代でし
たが、そのようなライフイベントは
未明のため、“出たところ勝負”の気
合入局でした。この 24 年間の中で、
保健所勤務や緩和ケア病院勤務が頭
をよぎったこともありましたが、医
局の先生方、派遣病院のスタッフ、

両親の支援のもと、徐々に専門とす
べき道が開き、出産、子との米国に
おける研究生活を経て、現在に至っ
ております。

さて、今回 ACS の convocation
に出席させていただき、“自分達が、
責任の重い、誇り高い、素晴らしい
仕事をしている！”という米国外科医
師の臆面なき自負”に改めて感激し
ました。近年日本において“勤務時
間が長く、疲弊し、訴訟になりやす
く、希望者の少ない診療科”という
しょぼくれたイメージとなってし
まった外科。乳腺外科医師として手
術も化学療法も大好きと思いつつ仕
事をしていても、知らず知らずに自
負、自尊心を失っていた自分に気づ

かされました。モチベーションもリ
ニューアルされた今、残り少ない外
科医人生でもっと貢献できるよう、
手技のブラッシュアップ、術後再発
させないための諸努力、後進外科医

師、医学生の育成など一層の努力を
してまいりたいと思います。まだま
だ道半ば、夢の途中です。今後とも
ご指導のほどよろしくお願い申し上
げます。

略 歴

- 1991 年 3 月 新潟大学医学部医学科 卒業
- 1991 年 5 月 医師国家試験合格
- 1991 年 5 月 新潟大学医学部外科研修
- 1993 年 3 月 同研修終了
- 1993 年 4 月 東京慈恵会医科大学 第一外科学講座 助手
- 2002 年 11 月 ハーバード医科大学 ダナファーバー癌研究所 研究員
- 2003 年 5 月 博士(医学)取得
- 2005 年 1 月 東京慈恵会医科大学 外科学講座 助手
同大学附属病院乳腺内分泌外科 医員
- 2011 年 3 月 東京慈恵会医科大学 外科学講座 講師
同大学附属病院乳腺内分泌外科 医長



HARMONIC ACE[®]+

Greater precision through improved energy delivery

組織の状態を検知し、適切なエネルギー供給を行うことで、
より繊細な手術をサポートします。

ETHICON
PART OF THE **Johnson & Johnson** FAMILY OF COMPANIES

製造販売元:ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社 メディカル カンパニー 〒101-0065 東京都千代田区西神田3丁目5番2号 TEL (03) 4411-7905
高度管理医療機器 販売名:ハーモニック ACE プラス 承認番号:22600BZX00425000
高度管理医療機器 販売名:ハーモニック スカルペル II 承認番号:21300BZY00662000

ETHC0245-01-201601 ©J&JKK 2016

全長 0.19 mm のアフリカ象。

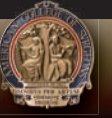


創造で、想像を超える。



すべての革新は患者さんのために
中外製薬

Roche ロシュグループ



Alumni Party と Japan Chapter Cocktail Reception

東京慈恵会医科大学葛飾医療センター外科

吉田 和彦

Kazuhiko Yoshida, MD, FACS, Department of Surgery, The Jikei University

Dr. Atul Gawande は、Harvard 大学、Brigham and Women's Hospital に勤務する内分泌外科医であるが、近年は WHO の "Safe Surgery Saves Lives" program を主導し、"WHO Surgical Safety Checklist" の普及に尽力している。彼はライターとして、外科レジデントの時代より The New Yorker に投稿しているが、初著である "Complications: A Surgeon's Notes on an Imperfect Science" の中で、Clinical Congress (CC) 様子をレジデントの視点で的確に描写している。

「結局のところ、学会には私たちを引きつけてやまない大事なものがあるのだ。医者は孤立した世界に住んでいる。出血と検査と切り刻まれる人から成る異質の世界だ。(中略) 医者は孤立しているだけでなく孤独なのである。(中略) 一年に一度、その気分を分かち合える人々が集まる場所がある。どこを向いても仲間がいる。そして、近づいてきて親しげに隣に座る。主催者はこの学会を「外科医の議会(Congress)と呼ぶが、的を得た呼び名だ。そう、私たちは、数日の間、いいところも悪いところもひっくりめ、医者だけの国の住人になるのである。(コード・ブルー

医学評論社 2004 年より、引用)」

アメリカは広く、多くの医療過疎地域がある。いわゆる僻地の診療を担っている外科医も CC に集まってくる。ちなみに、Dr. Gawande のお父様も Ohio 州の片田舎で泌尿器科を開業していたので、医療過疎地域の外科医の気持ちがよくわかると記している。CC の時には日本の学会では味わえない、外科医の気概、凜として自信にあふれた姿、さらにはアメリカ人が一般的に有する大らかさを通り越した「人懐っこさ」を感じるのは、私だけではあるまい。

CC の際には全米から外科医が集まるので、resident、fellow、あるいは attending として働いた職場である大学や大病院が主催する多くの同門会 (Alumni Party) が開催される。多くは cocktail reception の形式で、ちょっと立ち寄って (長く滞在する外科医もいるが)、昔話、あるいは現状の話に花を咲かせることになる。無論、reception はオープンなので、施設に在籍した外科医だけでなく、友人が訪ねることも多い。私も留学先の Memorial Sloan-Kettering Cancer Center、あるいは友人が chair person をしている University of Washington や Loma Linda University の Alumni

Party には、可能な限り参加し、旧交を温めている。同期の fellow と昔話、家族のこと (奥さんの名前が変わっていることが少なくないので要注意ではあるが)、現在の職場などの話をするのは楽しいものである。

Japan Chapter の Cocktail Reception は、alumni party の流れに沿って、2003 年より、当時 governor であられた山川達郎先生により始められた。北米だけでなく、ヨーロッパやアジアの知古の外科医、あるいは Japan Initiates との親交を深めることが、最大の目的である。毎年、ACS の元 president も含めて、多くの方にご参加いただいている。ここ数年は convocation 後の President Reception との開催時間が重複したので、本年は、例年の日曜日の開催ではなく、10 月 17 日

(月) 19 時よりの開催を予定している。本年の CC に参加予定の会員の皆さんには、是非、(電子?) 手帳に Cocktail Reception のマークをしていただくよう、お願いする次第である。

Dr. Gawande が述べているように、CC は「人懐っこい」外科医と会うことも参加する大きな目的の一つである。Alumni Party や Japan Chapter Cocktail Reception を通じて、より多くの新しい出会いや再会の機会が得られれば、ご同慶の至りである。



Japan Initiates 2015 と共に。(昨年の CC (Chicago) における Japan Chapter の Cocktail Reception にて)

略歴

1980 年	東京慈恵会医科大学卒業
1980 年～1984 年	国家公務員共済虎ノ門病院外科
1984 年～	東京慈恵会医科大学 (旧第一外科→現外科学講座)
1986 年	癌研究会附属病院外科
1987 年～1988 年	Memorial Sloan-Kettering Cancer Center 外科
2004 年～	東京慈恵会医科大学葛飾医療センター外科
2010 年～	Japan Chapter Secretary



私たちは人びとの健康を高め
満ち足りた笑顔あふれる 社会づくりに貢献します。

TAIHO 大鵬薬品工業株式会社
TAIHO PHARMACEUTICAL CO., LTD.
<http://www.taiho.co.jp>



事務局 便り

本号では、執筆をお願いした方より原稿をいただくことができず、結果として、一貫性のない内容になってしまったことをお詫びします。

我が敬愛するサムライ外科医、加納先生は、毎年 Clinical Congress (CC) に参加され、Japan Chapter の Reception にも出席いただいています。今回の投稿で、ACS にいかにか深く肩入れ? されてきたのかを、理解することができました。加納先生より紹介された Ms. Marion Rapp, International Liaison は、森先生の原稿にあった我らの恩師である秋山先生の ACS での最大の友人の一人でした。長らく、日本も含めた北米外の fellow との橋渡しをしてくださったことを、懐かしく思い出しました。

江口先生の恩師の兼松先生とは 1991 年 Chicago で一緒に Convocation に列席させていただきました。Japan Chapter の発展にご尽力いただいた兼松先生の薫陶を受けた江口先生が、毎年、若い医局員を ACS に同行し、世界に目を向かせる様を見るにつけ、連綿と続く人の繋がりを感じます。現在、Japan Chapter の Councilor を担っていただいております。今後も更なる貢献をお願いする次第です。

星先生の投稿では、日米の外科の良い点と悪い点を客観的に、しかもクリアカットに明らかにしていただきました。米国で活躍する日本で教育を受けた外科医の視点で、今後も積極的に、日本に医療に対する提言をお願いしたいと思います。星先生が reception に出席されるのも、恩師である加納先生との再会が一つの要因であることに、「絆」を感じました。

森先生は、私にとって刎頸の友であり、ゴルフも含めて多くの時間を共有しています。秋山先生、Dr. Skinner、Dr. Way、Dr. Pellegrini と、

人との巡り合わせの妙を感じざるを得ません。不肖の弟子として、より広い世界へ導いていただいた恩師への感謝にたえません。

三澤先生からは、「親孝行物語」について触れていただきました。長らく患っておられたお母様に、最後まで最善の医療を施されたことには、本当に頭が下がる思いです。天国でも、息子さんの現在の活躍を見守ってくれていると思います。英語が堪能で、国際感覚あふれる外科医、三澤先生の今後のさらなる活躍が楽しみです。

野木先生からは、New Fellow としての抱負を述べていただきました。慈恵医大からばかりからの投稿で恐縮ではありますが、野木先生は Boston の Dana Farber Cancer Institute への留学経験がある、新進気鋭の女性外科医です。今後、女性外科医が益々増える中で、リーダーとして国際的な活躍が期待されます。

私の原稿の中でも述べさせていただいたように、結局人生は、人との出会いとその後の生かし方であると思います。今回投稿をいただいた皆さんのように、言葉の問題はあっても、より広く、高い世界を積極的に目指せば、得るものも大きいと思います。一方で、この感動を後輩に伝える責務も感じざるを得ません。

Japan Chapter は今後も人々との出会いを大切に、会員の皆さんのさらなる飛躍の後押しができればと考えています。更なるご指導、ご鞭撻をお願いする次第です。

ACS 日本支部事務局 吉田和彦

〒125-8506 東京都葛飾区青戸6-41-2 東京慈恵会医科大学葛飾医療センター
TEL.03-3603-2111 FAX.03-3838-9945 e-mail:kaz-yoshida@jikei.ac.jp

New Fellows

新入会員名簿

Yasuhiko Mohri	毛利 靖彦 (三重大学医学部)
Mitsuro Kanda	神田 光郎 (名古屋大学医学部)
Tomomi Mohri	毛利 智美 (遠山病院)
Takeo Fujita	藤田 武郎 (国立がん研究センター東病院)
Keishi Sugimachi	杉町 圭史 (福岡市民病院)
Yo-ichi Yamashita	山下 洋市 (九州がんセンター)
Osamu Itano	板野 理 (慶應義塾大学医学部)
Hideaki Obara	尾原 秀明 (慶應義塾大学医学部)
Masahiko Taniguchi	谷口 雅彦 (聖マリア病院)
Tomohiko Adachi	足立 智彦 (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科)
Keiichi Okano	岡野 圭一 (香川大学医学部)
Hiromitsu Hayashi	林 洋光 (済生会熊本病院)

Hidenori Karasaki	唐崎 秀則 (徳洲会札幌東徳洲会病院)
Hidetoshi Nitta	新田 英利 (熊本大学医学部)
Katsunori Imai	今井 克憲 (熊本大学医学部)
Masaaki Iwatsuki	岩槻 政晃 (熊本大学医学部)
Takatsugu Ishimoto	石本 崇胤 (熊本大学医学部)
Takuya Matsumoto	松本 拓也 (九州大学)
Tatsuro Okamoto	岡本 龍郎 (九州大学)
Hiroaki Shiba	柴 浩明 (東京慈恵会医科大学)
Hirofumi Daiko	大幸 宏幸 (国立がん研究センター東病院)
Hiroshi Kawahira	川平 洋 (千葉大学医学部)
Tomoyuki Yano	矢野 智之 (横浜市立みなと赤十字病院)
Hiroko Nogi	野木 裕子 (東京慈恵会医科大学)

抗悪性腫瘍剤 抗ヒトEGFR^{注2)} モノクローナル抗体

薬価基準収載

アービタックス® 注射液 100mg

セツキシマブ(遺伝子組換え)製剤

生物由来製品 劇薬 処方せん医薬品^{注1)}

注1) 注意—医師等の処方せんにより使用すること

注2) EGFR: Epidermal Growth Factor Receptor (上皮細胞増殖因子受容体)

ERBITUX®
CETUXIMAB



●効能又は効果、用法及び用量、警告、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

MERCK Merck Serono

製造販売元 **メルクセローノ株式会社**
〒153-8926 東京都目黒区下目黒1-8-1 アルコタワー
[資料請求先] メディカル・インフォメーション(TEL)0120-870-088

販売提携



アステルマイヤーズ株式会社

〒163-1328 東京都新宿区西新宿6-5-1

[資料請求先] メディカル情報部(TEL)0120-093-507

アービタックスおよびERBITUXはイムクロン エルエルシーの商標です。 2013年10月作成